

現代韓国の〈巡礼〉と民族主義

光州事件(1980年)以後

Pilgrimage, *Sunrae* and a Nationalism in Contemporary South Korea:
Since *Kwangju Minjung* Uprising in 1980

真鍋祐子

はじめに

①ある〈巡礼〉の誕生

②光州巡礼の現象論

③メタファーとしての光州巡礼

④もうひとつの祖国を求める旅へ

おわりに

【論文要旨】

本稿の目的は、政治的事件を発端としたある〈巡礼〉の誕生と生成過程を追うなかで、民俗文化研究の一領域をなしてきた巡礼という現象がかならずしもア・プリオリな宗教的事象ではないことを示し、その政治性を指摘することにある。ここではそうした同時代性をあらわす好例として、韓国の光州事件(1980年)とそれともなう巡礼現象を取り上げる。

すでに80年代初頭から学生や労働者などの運動家たちは光州を「民主聖地」に見立てた参拝を開始しており、それは機動隊との甲い合戦に明け暮れた80年代を通じて、次第に〈巡礼〉(*sunrae*)として制度化されていった。しかし、この文字どおり宗教現象そのものとしての巡礼の生成とともに、他方ではメタファーとしての巡礼が語られるようになっていく。

光州事件の戦跡をめぐるなかでは犠牲となった人びとの生き死にが頻繁に物語られるが、それは〈冤魂〉〈暴徒〉〈アカ〉など、いずれも儒教祭祀の対象から逸脱した死者たちである。光州巡礼における死の物語りは、こうしたネガティブな死を対抗的に逆転評価するなんらかのイデオロギーをもって、「五月光州」のポジティブな意味を創出してきた。すなわち光州事件にまつわる殺戮の記憶の物語りに見出されるのは、自明視された国民国家ナショナリズムを超え、それに対抗する代替物としての民族ナショナリズムを指向する政治的脈絡である。

光州をめぐるメタファーとしての巡礼は、それゆえ、具体的には「統一祖国」の実現過程として表象される。そこでは統一の共時的イメージとして中朝国境に位置する白頭山が描出されるとともに、統一の通時的イメージとして全羅道の「抵抗の伝統」が語られる。

キーワード：光州事件、光州巡礼、死の物語り、国民国家ナショナリズム／民族ナショナリズム、もうひとつの祖国

はじめに

本稿のもととなった研究報告「巡礼と〈死〉の物語」は、もともと「〈日本〉民俗文化研究の新たな展開へ向けて」と題するグループ発表のなかで行なわれたものである(1998年11月19日)。このような表題のもと、ことさら“韓国”を取り上げた意図は、他のメンバーが一国民俗学の自明性を内側から解体しようとしたの⁽¹⁾に対し、筆者にはそうした作業を外側から照射するという役割が与えられたからであった。分断国家である韓国のばあい、日本に比べて、一国民俗学が当然のように依拠している国民国家論には、割合ほころびが生じやすいといえる。わけでも80年5月の光州事件は、最終的に駐留米軍が空挺部隊の投入を容認したことで、その惨禍が拡大されたと思われた点から、あらためて人びとに“分断状況”を認識させる契機となった。そして分断状況を前提とした「南韓」の国民国家ナショナリズムに対するアンチテーゼとして、分断状況を克服したところに「統一祖国」を希求する民族ナショナリズムが簇生してきたのである。このような動態的環境におかれた韓国の民俗文化は、同時代性なかんずく政治性を帯びやすいと考えられる。本稿ではその好例として、光州事件に端を発した〈巡礼〉(sunrae)の誕生と生成過程を取り扱う。

本論に先立ち、まずは「巡礼」と「観光」の違いについて見ておこう。どちらも移動をとまなう旅のあり方だが、巡礼が単なる観光行為と異なるのは、第一に聖なるものとの「交感」経験が巡礼者集団内で「共有・共感」される点であり、第二にひとつひとつの巡礼地が聖なる意味の一貫性をもって、相互に結びあわされている点である。このような各地点をたどる途上で、聖なるものとの交感をわかちあう共感の感覚はより濃密なものとしてされる[橋本 1999: 82-83]。

次に「巡礼」という用語の問題である。英語で pilgrimage というばあい、そこには複数聖地型巡礼ないし円周型巡礼と呼ばれる狭義の「巡礼」と、単一聖地型巡礼と呼ばれる「参詣」の意味が、同時に含まれている[星野 1981: 156-157]。宇宙の中心とされる地点が存在する「参詣」のばあい、聖と俗の区分が明瞭で、俗→聖→俗という往還運動の絶え間なき反復の結果、この二つの空間の結節点にあたる場所にマチが形成されたのに対し、「巡礼」における霊場とはそこでたどられるミチそのものであり、世界の中心となる地点は存在しないかわり、巡拝のプロセス自体がひとつの総合的宇宙を構成している[真野 1996: 326-327]。

ところで日本民俗学における巡礼研究は、上記した狭義の巡礼と参詣の双方を対象としながら、宗教現象そのものとしての巡礼に焦点をあててきた。しかし、その多くはすでに当該の社会構造のなかに組み込まれた制度としての巡礼であり、ばあいによっては研究者自身もこれをア・プリオリな現象と認識している観がいなめない。それはきわめて静態的な対象のとらえ方といえるが、ことに近代以降のダイナミズムに満ちた社会の動きを勘案すれば、たとえ一地方の民俗慣行にすぎないとしても、存在の被拘束性という点は看過できないのではないだろうか。また近代には官と民の相互作用という新たな局面が生じたが、そこからたとえば、郷土の民俗には「中央政府の視覚からすれば国家の destabilizing factor と見なされかねぬモメントがある」[鈴木 1987: 121]といった状況が見出されはしないだろうか。韓国をフィールドにしている筆者にとっての幸運は、現代の政治変動のなかで生まれたある〈巡礼〉現象をめぐって、それが制度化されるまでのプロセスをあとづけ

ることができた点である。これはア・ポステリオリな、つまりなんらかの経験によって生じたまったく新しい現象であった。

光州巡礼の中核にあるのは、まず光州事件という歴史的〈事実〉である。その戦跡をめぐる巡礼において、人びとはあの一とつひとつの出来事が起こった時と場に回帰しては、そこに付着した死者たちの物語りを内面化させ、めぐりという自らの身体表現をもって事件そのものを反復する。こうして再現されたことからは、しかしながら事実そのままではなく、構築されたところの〈事実+α〉である。まず事件の政治的意味が詮索され、そこから引き出されたバイアスが、個別の出来事の記憶のされ方、語られ方を枠づけるのである。このような「意味の体系」は巡礼そのもののあり方にも投影されると考えられる。そこで筆者としては、巡礼現象をめぐるダイナミズムをとらえ、そもそも巡礼とは何であるかを問うためにも、宗教現象そのものとしての巡礼とは別に、上述したようなメタファー化とでもよぶべき巡礼の側面に注目したいと思うのである。

①……………ある〈巡礼〉の誕生

光州事件とは、80年5月18～27日、韓国全羅道の中心都市・光州において展開された、10日間にわたる抗争の出来事である。その簡略な経緯は表1に整理したとおりである。

事件の導火線となった14～16日の民主大聖会とたいまつデモは、前年10月26日に朴正熙大統領が暗殺された後、それまでの強権政治から一時的に解放された人びとによって全国的な広がりを見せた、一連の民主化運動の流れのなかに位置づけられる。そして、このような事態を重く見た新

表1 光州事件（1980年5月）の展開過程

14日	道庁前の噴水台で、大学生たちによる「民主大聖会」が開催される →14, 15日, 街頭デモ
16日夜 17日夜	5・16軍事クーデター（1961年）の記念日を期して、たいまつデモ 非常戒厳令ともない、第七特戦旅団が全南大学校など各大学に進駐
18日	非常戒厳の拡大措置による休校令 全南大学校正門に集まり排除された学生たちが、市内へ出てデモを展開 戒厳軍が市内に投入される …光州事件の始まり…
19日 20日夕方 21日朝方	一般市民が学生デモへの参加をはじめ バス、タクシーなど、二百余台が車両デモを展開 税務署、KBS光州支社に、市民たちが放火 戒厳軍、光州駅前で実弾射撃 市民、車両を用いて郊外地の予備軍武器庫から武器を奪取→「市民軍」結成
夕方	戒厳軍、光州より撤収 市民軍、戒厳軍撤収後の道庁を占拠
22～26日	市民軍による光州自治 戒厳軍は市外郭部を遮断
27日朝方	駐留米軍が、その指揮下にある四個大隊の韓国軍の光州投入を承認したことにより（22日）、市民軍占拠下の道庁が武力制圧される 軍人2名、市民軍17名が死亡 …光州事件の終結…

軍部が17日24時をもって非常戒厳を全国に拡大し、そのさいに金大中を連行したことから、光州の全南大学校正門前には翌朝、「戒厳撤廃」「全斗煥辞任」にくわえ、「金大中釈放」という新たなスローガンを叫ぶ学生たちが群れつどったのである。すでに大学を封鎖していた戒厳軍は彼らをこん棒で殴打したが、かえって学生たちは市民らに急を告げんと市街地へ出ていき、デモを敢行したという。19日からは一般市民の方でもこれに呼応しはじめるが、もっとも決定的だったのは20日以降、バスやタクシーなどの運転手たちがデモに合流したことである。それは運動を行なう側にとっては機動力の確保を意味し、事実、21日には郊外にある武器庫から武器がもち出され、このことが市民軍の結成をうながしたのである。またそれによって戒厳軍は同日夕方、光州から一時撤収することになり、かわって市民軍が26日まで光州自治を行なった。その間に市外郭部を遮断しておいた軍部は27日明け方、駐留米軍の認可(22日)にしたがって空挺部隊を投入、銃撃戦のすえに市民軍を武力制圧した。こうして市民軍17名を含む民間の犠牲者189名(戒厳司令部の発表による)、軍人の犠牲者2名という痛みをとめないながら、光州事件は幕をおろしたのであった。

この189名の犠牲者たちは当初、いずれも国是に違反した〈暴徒〉ないし〈アカ〉のレッテルを貼られて葬り去られ、屍は郊外の望月洞にひとまとめにして埋められた。横死者である彼らの靈魂は本来、父系出自集団の次元においても儒教祭祀の対象とはなりえない〈冤魂〉だが、遺族たちはあえて儒教式の共同祭祀で1周忌を執行し、それが機動警察とのあいだに弔い合戦を惹起するきっかけとなった。事件の真相は情報封鎖により光州の外では秘匿されたが、口コミで伝えきいた学生たちはすでに80年代初頭から、毎年5月18日に前後して光州を訪れ、望月洞で遺族たちと合流してはともに死者を参拝し、その名誉復権のために闘いはじめていた。よって弔い合戦は、やがて機



【地図】 光州事件「戦跡」の巡礼コース
観光パンフレット「5・18聖地巡礼—義郷光州」(光州市発行)による

動隊との烈しい戦闘へと展開してゆくのがつねであった。だが公式的にはあくまでも、光州事件は最初から“なかったこと”であった。そんな当時の状況について、たとえば次のような記述がある。

「事実、『その日』を語るときには『小さな声』が必要であり、とくに望月洞には罪人のようにして行かなくてはならなかった。『光州』と『望月洞』に張りめぐらされた“見えない荊の鉄条網”⁽²⁾のためである」

この“鉄条網”が解かれはじめたのは、87年6月29日の民主化宣言を機にしてのことであった。まずは同年1月、取調べ中のソウル大学校の学生が水拷問により死亡する事件（朴鍾哲拷問致死事件）が起きたことで、民主化要求のデモが一般市民にまで波及し、全国的に拡大されることとなった。つづく6月には、上記事件をめぐる抗議デモの先頭に立っていた延世大学校の学生が、催涙弾の直撃を受けるという事故が発生する（約1ヵ月後に死亡）。これにより汎国民的規模にまで膨れあがったデモ隊の、民主化要求への気運はさらに高揚し（6月抗争とよばれる）、ついにあらがいきれなくなった政府は盧泰愚民正党代表の名義で、「大統領直接選挙制改憲、拘束者の釈放、言論自由の保障、地方自治制の実施、大学の自律化、反体制運動家に対する赦免・復権」などを盛りこんだ6・29民主化宣言を発表するのである。こうして翌年4月に実施された国会議員選挙では史上初の「与小野大」の国会が誕生した。その結果、はじめて光州事件に関する国会特別委員会が設置され、国会で聴聞会を開くなど、真相究明への第一歩を踏み出すことになった。また11月には、光州事件を「民主化運動」と位置づけ、前向きに評価するという趣旨の特別談話が、盧泰愚大統領より発表された。このように、かつては“なかったこと”であった光州事件が、“あったこと”として復活せられ、しかも民主化への努力のあらわれというプラスの評価をもって語られるようになったことは、結果として光州巡礼の誕生をうながした。実際、望月洞への出入りも自由化され、光州に対して「聖地」や「巡礼」といった言葉が冠されるようになったのは、その直後からである。

民主化宣言以後、はじめての5月を迎えた88年の状況について、地元誌『月刊芸郷』は、「その“鉄条網”がいくらかは取りのぞかれたのか、望月洞はいま『お客さま』を迎えるのに忙しい」と語り、「『外地のお客さま』もまた少なくない」と指摘している。すなわち、

「さる2月にはソウル教育大生20名が『時局自殺』で亡くなった朴宣永さん⁽³⁾を追悼するために訪れ、同じころ、釜山大サークル連合会の代表60名も望月洞を訪れている。とくに江原道原州市の尚志大生たちは巡礼者の痕跡を残していった。“民主聖地望月洞墓地民族尚志参拝”というプラカードがそれ。

“こうして見ると、望月洞は遠からず聖域巡礼の必須コースになるのではないかと思います”
望月洞で出会った全南大生A君の言葉である⁽⁴⁾」

これが光州巡礼の始まりであった。それでも当初は個別的・局地的な追慕行為にすぎなかったものが、92年に軍事政権が終焉したあたりから、在野団体や各界の活動家たちの連合からなる5・18行事実行委員会を中心に、多種多様な追慕行事は急速に構造化をとげていく。たとえば巡礼のモデルコースが設定され（地図参照）、規定の研修プログラムを終えた聖地巡礼案内者が組織され、それぞれの戦跡を舞台に、そこで生じた出来事にちなむ各種「五月行事」が企画されるようになる（表2参照、次頁）。また事件の突破口を開いた全南大学校は現在、巡礼者たちに宿泊その他のサービスを提供する「巡礼のセンター」として機能している。こうした〈巡礼〉（*sunrae*）とよばれる

表2 五月行事日程表(1996年)

日時	行事	場所
11(土)10:00 15:00	児童作文広場 請願運動宣布式	望月洞墓地 道庁前
11(土)~17(金) 11(土)~20(月)	絵画の広場 絵画展示会「わが天, わが地」	カトリックセンター近く 旧東区庁~光州銀行
12(日) 12(日)~28(火)	聖地巡礼案内団発足式 木浦地域記念祭	木浦市内一円
13(月)14:30	16周年記念ミサ(天主教光州大教区)	望月洞墓地
14(火) 19:00 14(火)~20(月)	五月文学祭 KBS 開かれた音楽会 国際青年キャンプ	カトリックセンター 朝鮮大学校運動場 潭陽松岩野営場および市内シンポジウム会場
15(水)19:30 15(水)~17(金)	学術討論会「アメリカをどう見るべきか?」 街頭音楽会「五月の歌」	無等コンベンションセンター カトリックセンター前
16(木)13:30 14:00 18:30	学術討論会 「5・18民主化運動の評価と展望」 Y市民フォーラム 五月女性祭 アメリカの公開謝罪のための 市民・学生かけっこ大会	金谷文化館 YWCA " 市内一円
17(金)10:30 14:00 18:00 19:00 17(金)~19(日) 17(金)~20(月) 17(金)~20(月)	慰霊祭(円仏教光州全南教区) 鎮魂祭(嶺湖南宗教学人平和会議) 街頭行列クッ 前夜祭 追慕館設置 五月写真展 5・18ビデオ上映	望月洞墓地 カトリックセンター 市内一円 道庁前 尚武館 カトリックセンター前 地下商店街出合いの広場および望月洞墓地
18(土)10:00 " 11:00 13:00 14:00 " 16:00	16周年追念式(行事委・遺族会・光州市) 全国労働者大会 追慕法会(仏教寺庵連合会) 全国農民大会 記念礼拝(光州基督教連合会) 5・18追慕音楽会 記念大会	望月洞墓地 道庁前 " " ハンピッ教会 道庁前 "
19(日)11:00 " 14:00 19:30 19(日)~20(月)	全国労働者マラソン 韓国青年決議大会 精神継承国民広場 記念音楽祭 全国タクシー労働組合連合聖地巡礼	光州矯導所~望月洞 光州駅 道庁前 光州文化芸術会館
20(月)15:00 19:30	民主技士の日 記念国楽公演	無等競技場 光州文化芸術会館
21(火)	献血の日	尚武館
25(土) 25(土)~6月30日	研究発表「5・18被害者の後遺症研究」 劇団トバギ「クミの五月」北米公演	無等コンベンションセンター アメリカ, カナダ
26(日)10:00	青少年開かれた広場, 5・18 1日体験学校 ハヌル・マジ・クン・クッ(民族巫芸人大広場 -5・18 霊魂のための鎮魂クッ)	北区青少年修練館 民族都堂・教堂

* 『5・18民衆抗争第16周年資料集』(5・18民衆抗争第16周年記念行事委員会, 1996年, 40~41頁)による。なお, これらのプログラムは記念行事委員会での審議を経て採択され, 記念行事委員会支援による公式日程に組み入れられた五月行事である。

現象は、ひとつひとつの戦跡を結んで、最後は望月洞にてあがりになるという複数聖地型巡礼でありながらも、韓国全体で見たばあい、光州それ自体がひとつの宇宙の中心をなす単一型巡礼を構成している。それは「巡礼」か「参詣」かで割りきれられる形態ではなく、むしろ望月洞へといたる一種の「個々の巡礼霊場の巨大な综合体」[渡邊 1980: 61]とでも見なしたほうがよさそうである。

なお金泳三大統領は95年末、公訴時効停止、記念事業、賠償などを盛りこんだ5・18特別法の制定を決め、翌年8月にはついに全斗煥と盧泰愚に極刑の判決が宣告された。つづいて97年には5月18日が国家記念日に制定されるとともに、望月洞が聖域化され、犠牲者たちの亡骸は新墓域へと移葬された。これにより、光州巡礼の制度化は完成されたのである。

②……………光州巡礼の現象論

5月の光州は現在、文字どおり聖地の様相を呈し、一日のべ2~3万といわれる多くの巡礼者たちを集めている(写真1参照)。まずは巡礼のコミュニティ⁽⁵⁾性に注目してみると、光州につどう人びとの行為や現地の様相には、きわめて巡礼的な要因がうかがえる。だがこの点はすでに拙著で詳述したので[真鍋 2000: 98-105, 134-135], ここではあえてくり返さない。



写真1 運動歌謡をうたう巡礼者たち(錦南路で)

また光州巡礼は、巡礼の現象論として指摘されてきた諸側面[真野 1996:

315-317]を、いずれも満たしていると考えられる。つまり巡礼とは、第一にアマチュアの宗教であり、第二に死者の供養・鎮魂という性格を有するものであり、第三に多くのばあい、肉体的な障害が個人を巡礼へとかりたてるものである。また第四に習俗のレベルで見ると、たとえば以下のような側面が指摘される。すなわち、①若者たちの成人儀礼の一環と見なされる、②巡礼の服装は死に装束とされ、そこに再生への願望が内包されている、③四国遍路で「同行二人」という言葉があるように、巡礼にはかつて弘法大師が歩いた路程を追体験するとの意味あいが含まれている、④道筋の住民にとっては巡礼者=弘法大師であり、そこから巡礼者への接待の習俗が生まれた、などの点である。

たしかに光州巡礼は擬宗教的ではあるものの、上記した巡礼の一般的諸現象と一致するところが多い。まず光州巡礼の本義が死者の鎮魂と追慕にある点はいうまでもないだろう。その根幹には、遺族たちが儒教祭祀を挙行したり、巫者を招いて鎮魂の巫儀をとり行なったりするのにくわえ、各教会ではそれぞれの聖職者たちが追慕のミサや礼拝を、また各寺院では僧侶たちが追慕法会を主管するなど、いわゆるプロフェッショナルによる宗教的行為が見られたが、集まってくる巡礼者たちはかならずしもそうとはかぎらなかつた。あるいは光州を巡礼するといえば、宗教に代替する政治

思想のプロフェッショナルと見なされなくもなかろうが、これとても後述するような理由により、当面はアマチュアであることを許容されているのである。

たとえば身体障害ならぬ精神的疲労の癒しを求めて、望月洞を訪れる人びとがいる。光州在住のある運動家は心がついえそうになると決まって、もっとも敬愛するひとりの死者の墓前に詣るのだという。一般に望月洞を参拝する巡礼者たちには、それぞれの心中で尊崇する死者が定まっているばあいが多いように見受けられる。死者たちひとりひとりの墓前には遺影のほか、持参された手紙や折り鶴などを入れるガラスケースがおかれている。そこに納められた文面を断片的に読み拾っていくと、懦弱な心を懺悔して、運動への決意を新たにしたり、死者たちの血によってあがなわれ、生かされていることを感謝したり、またこれからいかに生きるべきかを教えてください、といった内容がしばしば目にとまる。巡礼者たちにとってこうした特定の死者たちは守り神のような存在、もしくは「いつも人生の師として、わが胸のうちを占めている」⁽⁶⁾存在であり、ガラスケースに納め



写真2

1991年4月、姜慶大殴打致死事件に抗議して焼身自殺した朴勝熙（当時、全南大学校2年）の墓。ガラスケースには遺影、手紙、折り鶴のほか、十字架や聖書がおさめられている。墓石には「五月英霊の墓」と染めぬかれた鉢巻きが結んである。

られた品々はいわば奉納物と解釈することもできるだろう（写真2参照）。

あわせて光州巡礼は大学の新入生たちに対し、知識人としての愛国心や社会意識のあり方を教育する機会にもなっており、その意味では成人儀礼としての機能もそなえている。彼らは死に装束こそ着けないが、一様に弔意を示す黒いリボンを腕につけ、団体ごとに色の異なるそろいのベストを身につけており、また性差という点でも服装はきわめて平準化されている。そしてすでに述べたように、彼らは何よりも精神的な、ないしは社会意識的な面での再生を願っており、めぐりの道行きは各人が敬慕する死者との「同行二人」によってたどられるばあいが多いといえる。一方、光州市民の側でも、聖地巡礼案内者などのボランティアとして巡礼者たちを迎え、道筋に無料給水所を設けたり、市場の婦人たちが市民軍に握り飯を差し入れたという史実にちなんだ「握り飯のわかちあい」行事（1998年）などを通じて、いわば“施行”にあたるような行為をほどこす⁽⁷⁾のである。また既述のように、市内の全南大学校や朝鮮大学校では、巡礼団に宿泊の場を提供している。

ところで上記したような市民と巡礼者との関係性は、実は、市民と市民軍、あるいは光州事件に殉じたとされるその後の民衆運動の犠牲者たちとの関係性の投影といえる。かつて市民たちは武器を手に戻ってきた市民軍を歓呼と拍手で出迎え、戒厳軍撤収後は、光州自治をになっていた彼らに

食料などを差し入れた。だが27日明け方の銃撃戦で殺された市民軍の屍は、いずれも人里離れた望月洞へと送られた。同様に市民たちは、光州事件に殉じたとされる死者たちの葬礼行列を歓呼と拍手、焼香と献花で出迎え、その亡骸を同じ望月洞の「食口」(=家族, *shikku*)として葬ることを許諾した。そして巡礼者たちにしてみれば、市民たちから接待されながらの、その道行きの終着点こそがまさに望月洞なのである。それだけに望月洞の死者たちは、彼らが倣うべき生き方の範型、また巡礼の同行者となる。それはすなわち、民主化や祖国統一といった大義にかけて命を惜しまぬ生き方であり、その実践の場となる運動の途上、死出の道のりをともに歩む魂の同行者である。

かくして望月洞を終着点とする光州巡礼の根幹には、メタファーとしての巡礼が見出されることになる。それならば、「個々の巡礼霊場の巨大な综合体」である光州とはいかなる宇宙であり、その中心点となる望月洞はいかなる聖なる意味を帯びているのだろうか。冒頭で筆者は、光州での出来事は〈事実+ α 〉として再構築され、物語りを貫く「意味の体系」は巡礼のあり方にも投影されているという見方を示した。以下の章では、まず光州事件のメタファー化および光州の記号化について述べたあと、具体的な巡礼の現場で語られる言説や描出される図案などに留意しつつ、この問いに対する検討をこころみたい。

③……………メタファーとしての光州巡礼

先に述べたように、反共という国是に照らして光州事件の犠牲者たちを見たばあい、それは暴徒やアカなどの政治的汚名を免れない人びとであった。実際には主婦や学童のように、政治イデオロギーとはどうも無縁の、反体制的な心情すら無きに等しい、たんなる巻き添え死のケースも多々あったが、体制側が事件自体を“なかったこと”にしてしまい、「光州」を口にすることさえ“流言蜚語”として取締まった以上、きせられた汚名に異議申立てをすることもかなわず、その名譽は剥脱されたままであった。これは国家のレベルにおける逸脱的な死を意味する。

さらに父系出自集団のレベルで見ればあいにも、そこにはいっそう根本的な問題が横たわっていた。もとより「私はこの歴史のために一にぎりの灰になります。[私の灰を]名もない川に流してください」といったように、まえもって死への覚悟が意思表示されているケースは別として、⁽⁸⁾非業の死をとげた大多数の死者たちは、おそらく望まずして「一にぎりの灰」にされる運命におかれたのである。「一にぎりの灰」とは多分に比喩的な言いまわしである。要するに、直系の男子の子孫を残せず、かつまた自然死を迎えられなかった者たちは、儒教祭祀で手厚く祀られる祖上神とはなりえず、墓標もないまま亡骸を山に埋められるか、さもなければ文字どおり「一にぎりの灰」とされ、骨粉を野山や川にまかれなくてはならなかったのである。なぜなら、この世に痛嘆や未練を残すような死に方をした者は冤魂となり、その恨みを生者への災いというかたちで表出すると信じられてきたからである。冤魂の祟りにおびえる生者たちが「一にぎりの灰を名もない川に流す」のは、そうした死者の痕跡を完全に消し去り、かつてこんな人が存在したという事実すら“なかったこと”にしてしまうためと考えられる。つまり光州事件の犠牲者たちは、家族のレベルにおいても逸脱的な死をとげたことになるのである。それだからこそ、あの一周忌のおりに遺族たちが、人里離れた望月洞の山中に墓標もなく埋められた死者たちの霊前で、儒教式の共同祭祀を行なったことは既存

の社会秩序に対して挑戦的な、きわめて価値逆転的な発想を含んでいたわけである。

遺族たちがもっとも声高に主張してきたスローガン「名誉復権」とは、すなわちそれほどまでに重大な意味をはらんでいたということである。かつて冤魂とされ、あまつさえ暴徒やアカとよばれた望月洞の死者たちをめぐる、遺族や運動家たちが主張したのは、これを〈英霊〉として祀りあげるといふ根本的な価値の転換であった。だが、そのためには死を意味づけるうえでの新たな枠組、ひいては新たな理念の創出が必要とされる。この過程でイデオログたちが着眼したのが、駐留米軍の存在であったと思われる。事件後の強権政治による抑圧状況は運動の地下化をうながしたが、一方で運動家たちは先鋭化し、ひそかに潜行してはむしろ緻密な運動理念を組みあげていったのである。かくして表面化したのが80年代半ば以降の反米闘争であり、光州事件を通じて「分断と統一の弁証法」が語られるようになっていく。すなわち光州事件とはアメリカを首班とする分断勢力の捨て石として惹起されたもので、あのと時の民主化要求デモは、分断を前提とした親米的な国家体制に非を唱えたものである。だから光州市民が対決した真の敵とは、対米従属的な国家体制に表象された分断状況そのものであり、ひるがえって彼らの闘いを貫く理念は民族の自決、そして統一である、……というのである。

ところで、このような事象のとらえ方が普遍化されていくなかで、光州はしだいにメタファーとして語られ、記号化されるようになったことがうかがえる。たとえば、韓国現代史を民主化運動・統一運動の視点から探究する若手の歴史学者たちは、光州事件を「1980年代の民族運動の水路を開く歴史の分水嶺」「民族の覚醒を生み出す源泉」に比定し、「光州は韓半島のいたる所で今も続いている」と指摘する[韓国民衆史研究会 1987:243]。このばあい、「光州」はもはや固有の地名ではなく、ひとつの記号と化している。では、それがいかなるメタファーかといえば、上記の引用文にもあらわれているように、キーワードは「民族」であろう。すなわち光州事件とは、対米従属的な「南韓」イデオロギーから脱却し、それに代わる民族自決の「統一祖国」を招来するための抗争として、いいかえれば既存の国民国家ナショナリズムから民族ナショナリズムへと覚醒する転換として、メタファー化される。かくして光州は分断状況に起因する悲劇そのもの、あるいは統一をめざす闘いそれ自体を暗示する記号となったのである。事実、80年以後の運動家たちをもっとも強く、なおかつ内面からつき動かしたのは、ほかならぬ「五月光州」「5・18」(オー・イルパル)などの合い言葉であった。

彼らにおける望月洞参拝、すなわち死者への素朴な追慕の行為が、光州巡礼として構造化されていくプロセスと、上に述べたような光州事件のメタファー化、光州の記号化は、ちょうど軌を一にした動きといえる。現時点での光州巡礼は、まるで瞭然たる擬宗教的現象のように人びとの目にはうつるけれども(たしかに現象的にはそうなのだが)、実のところ、その根本はメタファーとしての巡礼であったと見なすべきではなからうか[Reader 1993:9, 17-21 参照]。

④……………もうひとつの祖国を求める旅へ

メタファーとしての光州巡礼は、統一祖国をめざす運動家たちの闘いを模した道のりにほかならない。これは「民主大長征」などとも表現され、運動のプロセスを道にたとえる比喩的思考が見て

とれる。そうした道行きのイメージ、さらには終着点に待ちうけているはずの統一祖国のイメージとは、巡礼の具体的な場面のなかで、いかなるイメージで表象されているだろうか。以下、統一をめぐる共時的イメージ、および通時的イメージという視点から、その実例に論及してみたい。

(1) 統一の共時的イメージ

統一の共時的イメージを比喩的に表象したものとして筆者がもっとも興味ぶかく眺めたのは、97年に5・18行事実行委員会が制作した「5・18民衆抗争17周年」のポスターである。光州事件の始まりを予告する民主大聖会（14～16日）は全南道庁前で挙行されたが、このとき講演のかわりに使用された道庁正面の噴水台とそれを取りかこむ黒山の群衆を、上空から撮影した有名な写真がある。ポスターの図案は、この写真をいちばん低い位置におき、その上にジープを駆って銃をかまえる市民軍の彫像と、聖域化

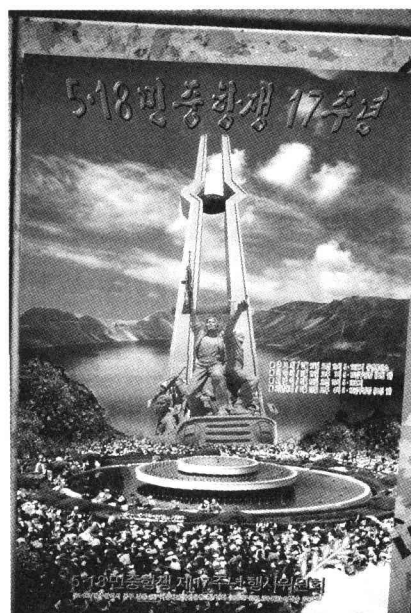


写真3 5・18民衆抗争17周年のポスター

された望月洞墓地内に新しく建立された「5・18民衆抗争追慕塔」の写真を合成し、これらの背景に白頭山山頂のカルデラ湖・天池の写真を配する、というものであった（写真3参照）。

下方にある二つの図は、実際の事件の推移それ自体を象徴すると考えられる。なぜなら道庁前で口火を切った光州事件は、道庁を占拠した市民軍による6日間の自治を経たあと、道庁周辺を舞台にした空挺部隊との戦闘をもって終焉を見たからである。つまり道庁は光州事件の始まりと終わりを同時に意味し、まずはこれだけで事件の自己完結性を語ったことになるだろう。そのうえさらに市民軍の彫像の写真が重ね合わされているのは、彼らの闘いと死に、より高次元の理念が模索された結果にほかなるまい。それは端的に言って、不義を憎み、民族や祖国統一のためならば命も惜しまないとされる、精神性の側面である。なんとすれば市民軍は、受肉された「5・18精神」⁽⁹⁾そのものとして、形而下で生起した分断悲劇の出来事を、そこにわが身を捧げることで形而上の統一世界へと架橋する、一種メシヤ的な存在と観念されているのである。現実世界の供犠となった彼らがその死をもって切り開いたとされる理念的世界は、それゆえ残り二つの図のなかに、なんらかの比喩をもって投影されていると考えられる。

まず5・18民衆抗争追慕塔のデザインについて、98年に光州市が発行した観光パンフレット「5・18事跡地案内」は、以下のような解説をしている（傍点は筆者による）。

「竿柱のかたちをした包みこむような左右の手には、5・18精神が森羅万象と宇宙を突きぬけ、汎宇宙的存在へと昇華されるように、との願いがこめられている。両手のまんなかにおかれた卵形の造形物は、新たな生命への復活を象徴する人物群像をあらわしている」

光州が聖地として世界の中心でありえるのは、光州事件から抽出された死と復活、分断と統一・和解の弁証法が、憎しみ、嫉み、恨み、いがみ合い、そして争いを業とする人類全体への救済財と観念されたからであった。民族主義者たちの言説上で、しばしば朝鮮は東洋のユダヤに、朝鮮民族

はディアスポラの民に比定される。また「分断の十字架」という言葉にも示されるように、かつてキリストの死と復活に象徴された人類の原罪と贖罪は、冷戦構造という20世紀の国際状況にあっていまや唯一の分断民族として残された、わが朝鮮においてはありえないのである。

このような民族の、ひいては世界人類の統一イメージを具象化した世界が、つまりは白頭山天池の図であったらう。朝鮮半島最高峰の白頭山（標高2,744 Mの休火山）は中朝国境という地理的な与件にくわえ、国祖・檀君が天下った山といわれており、また風水でも朝鮮民族の精気の源、アイデンティティの象徴と考えられてきたわけだから、それがすぐさま統一の共時的イメージに結びつくのはあまりに自然なことであった。この点がもっとも象徴的に示されているのが、たとえば統一運動における代表的スローガン「白頭山から漢拏山へ」⁽¹⁰⁾であろう。

白頭山への旅が、国家という既成の構造を超え、民族のコミュニタス（反構造）に出会わせるといった感覚は、すでに中韓国交樹立（1992年8月）以前の、初期の旅行者たちの紀行文からもうかがい知れる。同胞との出会いに感激し、相互の交歓を通じて統一祖国の未来を予見しながら、平等で友愛に満ちた民族のコミュニタスにあそんだ彼らは、その束の間の愉悦について、たとえば次のように述懐している。

「[白頭山麓にくらす同胞たちが]私に命がけで訪ねてくれたとあって、血肉に出会ったとき以上に手厚くもてなしてくれた熱烈な同胞愛は、白頭山の噴火口からわき上がる熱気よりも熱かった。白頭山に関心をもって26年目で、ようやくその頂峰に立てた感激も忘れがたいが、満州にくらすわが同胞たちの純粋な同胞愛から、『同族』とは何であり、『民族』とは何であるかを学んだことは、よりいっそう忘れられない」[陳 1986: 106]

「天の国[=白頭山天池]に行ってきた旅の疲れを露天温泉でさっぱりと解きほぐし、駐車場に出てきてみると、わが旅行団と延迎の同胞たちがともに踊っている。昔の文献で、わが民族はとくに歌舞を好むとあった。別れがたく、ひとりの同胞が大声で、『統一の日、また会いましょう』といった。『そうしましょう！私たちは白頭大幹の本流に沿って、あなたがたは松花江の流れに沿って、白頭で、天池で、私たちはほんとうに再会しましょう』」⁽¹¹⁾

昨今は運動家たちのあいだでも、このように中朝国境地帯（白頭山が位置する中国吉林省延辺朝鮮族自治州）を舞台とした同族との交歓がこころみられている。すなわち、民族主義的統一論者の代表格であった故・文益煥牧師の5周忌にあたった1999年、その生まれ故郷である龍井に中国朝鮮族のほか、在日および在米のコリアン、南北朝鮮の青年たちが合流して、同胞の再会を喜びあい、統一の道を模索するための「同胞談合大会」、それに文牧師の回顧集会が開催されたのである。現地からのレポートによると、「南北海外同胞の感動的な、熱い抱擁で行事がはじまった」というが、韓国からの参加者たちが出発直前に発表した声明文に、「50余年が流れに流れ、今日も河のように流れ出ている分断民族の涙をとめ、7千万同胞に美しい統一祖国を抱かせてさしあげるには、自主と民族大団結をなしとげなければなりません」とあるように、これもまた民族のコミュニタスに統一祖国の予兆をみようとすする願望のあらわれといえよう。⁽¹²⁾

ともあれ、このポスターに表象されたことがらを一言でいいあらわすとすれば、それは光州事件を意味づける有名なスローガン「5月から統一へ」が、もっとも的確といえるだろう。光州巡礼のコミュニタスで和合の愉悦を味わった運動家たちは、統一祖国のさらなる前味を求めて白頭山をめ

ざす。漢拏山と白頭山を南北に結ぶ一筋の線は、統一の共時的イメージを目に見えるかたちにしてくれる。そして海外渡航の自由化と冷戦構造の崩壊（1989年）、および中韓の国交樹立を経ることで、実際に彼らが白頭山を訪問できるようになったとき、そこには仮想現実ではない、本物の民族のコミュニティが現出したのである。それは彼らが思いえがいてきた統一のメタファーそのものであったに相違ない。

(2) 統一の通時的イメージ

あわせて統一のイメージは、歴史叙述においても通時的にメタファー化される。そこでは民族主義や統一運動の観点から歴史が編集しなおされ、そのなかで光州事件は「歴史の分水嶺」としての意味を付与される。そして、こうした歴史のプロセスそれ自体、究極的には統一へと向かう道筋であったことが物語られるのである。たとえば97年に聖域化事業が完成した望月洞の新墓域に、7枚のレリーフで構成された「体験空間」とよばれるスペースがある。レリーフに描かれた内容は、順に「壬辰倭乱 [= 文禄の役] の義兵 → 東学農民戦争 → 三一運動 → 光州学生独立運動 → 4・19 学生革命 → 5・18 民主化運動 → 統一広場」となっている。

そのさいのキーワードは「抵抗の伝統」であり、とくに光州が属する全羅道はそうした趣が濃いといわれる。実際ここに列記された歴史的事件のなかには、全羅道を震源地とするもの（東学農民戦争、光州学生独立運動、5・18 民主化運動）や、実質的な動員力という面で全羅道がもっとも影響力を発揮したもの（壬辰倭乱の義兵、三一運動）が多い。これらの事件はかつて謀反とよばれたもので、決起した人びとは逆賊として儒教的規範から排除され、族譜からも抹消された。前章で指摘したように、人びとにとっては儒教祭祀からはずされた冤魂をどう扱うかが最大の問題であった。しかしながら、この地元の英雄たちの闘いぶりは〈義民〉として巷間に記憶・伝承され、その累積物は、やがて朴正熙による本格的な国民国家建設の時代を迎えたとき、顕彰碑や記念碑、史蹟などの建造を通じて名誉を回復されたのである。

ともかく、こうした義民伝承の蓄積は、韓国の地方にいつしか「歴史の混在性」をもたらしたといわれている。この点について、韓国民衆の歴史認識を研究する坂井俊樹は次のように説明する。「近代の抵抗の顕彰碑と壬辰・丁酉倭乱、封建時代の抵抗者たちが、少なくとも同時代感覚で一つの地域のなかに混在しているのである。だからこそ自然に生活のなかに、祖国の危機を憂い立ち上がった人物の精神が、脈々と生きつづけているように思われる」[坂井 1997: 38]

これと同様の観点から光州事件をとらえたのが、作家の黄哲暎であった。すなわち当時の「爆発的な大衆情緒」の中核には、民衆運動の伝統と脈絡の血縁的・地縁的実存があったというのである[黄 1985: 23-25]。

ただ、ここでひとつ疑問に思われるのは、なにゆえ全羅道にあって、かくも「歴史の混在性」に厚みが見られるのかという点である。作家の宋基淑は全羅道の抵抗精神の始源を、百済を復興し、後百済を建国した甄萱に見出しながら、民間に伝わる甄萱説話には民衆の「夢と願望がこめられており」、そこに「百済遺民たちが百済を再建しようとする夢が、どれほど切なるものであったか、またその夢が、甄萱を通じて実現されなかったところで挫折してしまったことに、どれほど大きな悔しさを抱いていたかが見てとれる」と指摘した[宋 1985: 67]。つづいて東学思想と抗日義兵闘

争、相次ぐ小作争議、それに光州学生独立運動と、全羅道を舞台とした近代史における抵抗の歴史をひもときながら、以下のような興味ぶかい言葉を述べている。

「わが国の未来は南から開けるといふ〈南朝鮮思想〉〈南海真人説〉などの民間信仰は、こうした具体的な民族的力量の蓄積として、遠からず実現することかもしれぬ」[同：73]

「真人」はメシヤに類する朝鮮語であり、南海真人説とは要するに、真人が治める新たな祖国は全羅道から興されるというのである。このようなメシヤ信仰とユートピア願望の源泉は、李朝時代に流行した予言書『鄭鑑録』に見出されるという。これは李氏支配の王朝が五百年つづく、その後は鷄龍山新都内を都とする鄭氏の王朝が到来し、千年間つづくというものであった。実際、李朝後期に全州の人・鄭汝立が起こした反乱は、われこそがあの予言された新王・鄭氏であるとの主張によっていた。以来、全羅道は「逆郷」という汚名なレッテルを貼られることになる。

ところで『鄭鑑録』の予言思想は、東学とそこから派生した新宗教諸教団において顕在化している。したがって東学農民戦争や三一運動など、抵抗の伝統に列記された歴史的事件のいくつかは、「潜在的な『鄭鑑録』の革命意識が顕在化」した結果と見られている[宮田 1977：158]。

運動家たちが抱く統一イメージの背後にも、このような黙示録的な歴史意識とユートピア願望が横たわっているのではないだろうか。けれども、そうした筆者の見方は、いまだ憶測の域を出ないものだ。先にふれたキリスト教思想との関連性も考慮しながら、これは今後の課題に期したい。少なくとも興味ぶかい点は、この体験空間においてもまた、歴史の結末に「統一広場」がすえられていることである。1枚ずつのレリーフに描出された抵抗の歴史のメタファー化と、これらの出来事全体を貫く抵抗の伝統の行く先は、結局、通時的にイメージされた統一祖国にほかなるまい。その意味するところは、前出の5・18民衆抗争追慕塔に表象された「汎宇宙的存在」におきかえてもよいだろう。

かくして民族のコミュニタスは時代を超え、「歴史の混在性」のなかで、先烈たちと融合しあうかたちでの統一祖国を現出する。それは白頭山で再現された国籍にしばられない民族和合のコミュニタスとともに、大韓民国という祖国に対置されるべき「もうひとつの祖国」であり、メタファーとしての光州巡礼がめざしている旅の終着点なのである。

おわりに

ある事実を物語りへと導くメタファー化の手順は、たとえば次のようなレトリックが駆使されるとき、巡礼それ自体にも投影されるようになる。

「6千万韓民族は、民主主義の花を咲かせる未来の祖国へと向けた巡礼の旅路で、自身の責任を確認しなくてはならない」[趙 1986](傍点は筆者による)

ここで「6千万韓民族」とは南北朝鮮の総人口(上記の文章が書かれた86年当時)をさしているわけだから、「未来の祖国」とは要するに“統一祖国”のことである。それが闘いのプロセスとしての「巡礼の旅路」の終着点とすれば、この〈巡礼〉にとっては、統一祖国こそがまさしく総合的宇宙ということになる。擬宗教的な現象としての光州巡礼は、そうしたメタファー化の手順を踏むことでその形式が整えられ、制度化にいたったと考えられる。かくして反復されるようになった

巡礼の行為は、国家体制に対抗する統一運動の弁証法的展開、それ自体のアナロジーになるのである。

上述したような巡礼をめぐるダイナミズムは、宗教現象そのものとしての巡礼を、またその存立基盤になっている既存社会の構造を、ア・プリオリに考えていてはとらえきれない局面であろう。本稿で筆者がこころみしたのは、韓国がおかれた動態的環境に留意しつつ、制度化以前のメタファーとしての巡礼を論ずることであった。けれども、そうしたメタファー化の脈絡が何に由来するかに関しては、その要因をきわめて複合的な視点から探究しなくてはならないだろう。筆者のばあい、それは「抵抗の伝統」にくみした多様な宗教思想に分け入ることを意味するが、この点については次なる研究のステップとして他日を期したいと考える。

付記

本稿は主として、平成8・9年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費「韓国の民衆運動における宗教的エトスの分析」）による研究の成果であり、あわせて下記研究助成による成果の一部からなっている。平成11年度・旅の文化研究所第6回公募研究プロジェクト（一般・個人研究）「韓国におけるナショナリズムとツーリズム—白頭山観光とゲストの内発的動機を中心に」、および、平成11・12年度日本学術振興会科学研究費補助金（奨励研究A）「ナショナリズムの民族主義的転換から見た現代韓国の宗教運動と民衆運動」。

注

- (1)——共同発表者名と発表題目は、次のとおりである。政岡伸洋「民俗学は部落問題をどのようにみてきたのか」、島村恭則「境界都市の民俗学—下関の在日コリアン社会をめぐる」、中山和久「巡礼をめぐる理解と誤解—巡礼の周辺から立上がる『巡礼』の多様性」、金子毅「祇園祭における慰霊の性格」。
- (2)——「巡礼行列は絶えないが、みすばらしい“民族・民主の聖地”」【月刊芸郷】1988年6月号、100-101ページ。
- (3)——このばあいの「時局」とは80年以後の政治状況をさし、そうした文脈における死亡事件をとくに「時局自殺」「時局関連者」などよんで、光州事件によるケースと差異化している。朴宣永は87年、前出の「朴鍾哲拷問致死事件」のおり、このような韓国社会の現実をいかんともしがたい自己の非力さをせめさいなんで自殺（縊死）した、ソウル教育大学の女子学生。
- (4)——前掲記事、101ページ。
- (5)——ターナーはコミュニタスの下位類型として、実存的・自然発生的コミュニタス、規範的コミュニタス、イデオロギー的コミュニタス、の3つを指摘したが[ターナー 1981:125-126]、光州巡礼のばあい、そのいずれも見出される。また星野英紀は、内外の巡礼記を分析してコミュニタスを抽出し、これをターナーの枠組によって解釈している[星野 1981:98-115]。
- (6)——望月洞墓地管理事務室におかれた「芳名録」に、光州教育大学の学生が書き残した言葉（1993年3月19日付）。
- (7)——あるいは光州に移住して食堂を開き、巡礼者たちに食事をほどこしている姜慶大の母親の事例などもこれにあたろう。ちなみに姜慶大は、91年春、デモの渦中で機動警察に殺された当時、ソウルにある明知大学の1年生だった。
- (8)——当時、韓国神学大学の学生であった柳東雲の最後の日記より[在日韓国人政治犯を救援する家族・僑胞の会 1987:75]。
- (9)——5・18精神とはそれ以外にも、たすけあい、わかちあいの精神として語られている。これは事件の渦中、市民たちが負傷者のため輸血にならんだ話や、とりわけ戒厳軍による封鎖期間中、掠奪行為ひとつ起こらず、人びとが互いに乏しい食料や物資をわけあった話など、当時の美談をモチーフとしている。
- (10)——済州島にある漢拏山（標高1,950M）は朝鮮最南端の休火山である。だがこうした地理的与件のほかに、もうひとつ重要な要因がある。それは1948年の4・3事

件で、5月に予定されていた南韓の単独選挙に反対した人びとによる軍政府との武力闘争。結果、島民の5分の1にあたる約6万人が犠牲になったといわれる。この事件もまた分断の悲劇であり、長らく“なかったこと”として葬られてきたが、50周年にあたる98年には、光州巡礼の場でその名誉復権キャンペーンが展開された。(11)——(株)世界一流旅行社『白頭山・高句麗文化遺蹟地大探訪』(冊子), 49ページ。これは95年、『月刊

マル』主催「統一念願白頭山巡礼」に参加した昌原大学校史学科教授(無記名)の手記「行こう、白頭山へ」による。

(12)——民主主義民族統一全国連合『龍井消息』1~3号(1999年6月)による。なお、このときの参加者4名は全員、6月6日の帰国直後、金浦空港で待ちうけていた警察によって逮捕された。

引用文献

- 韓国民衆史研究会編著 1987 高崎宗司訳『韓国民衆史—現代篇』木犀社
- 黄 哲暎 1985 光州義挙追慕会訳『光州五月民衆抗争の記録——死を越えて、時代の暗闇を越えて』日本カトリック正義と平和協議会
- 在日韓国人政治犯を救援する家族・僑胞の会編 1987 「ああ、民主よ!自由よ!—韓国民衆化闘争の墓標」三一書房
- 坂井俊樹 1997 『韓国・朝鮮と近現代史教育——共生・共存の視点から』大月書店
- 真野俊和 1996 「第四篇 巡礼の構造および地方巡礼の研究成果と課題」真野俊和編『講座日本の巡礼第3巻—巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣
- 鈴木満男 1987 「ナショナリズムの祝祭—韓国の民俗文化祭を政治人類学的に観察する」『韓』107, 韓国研究院
- 宋 基淑 1985 「消えることのない抵抗と救国のたいまつ—東学農民戦争・韓末義兵・小作争議・学生独立運動」『月刊芸郷』9月号(光州)
- 趙 珖 1986 「三一運動は『民主長征』の第一歩」『東亜日報』2月28日付(ソウル)
- 陳 泰夏 1986 「愛国歌でうたった白頭山に登る」『自由公論』4月号(ソウル)
- 橋本和也 1999 『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社
- 星野英紀 1981 『巡礼—聖と俗の現象学』講談社現代新書
- 真鍋祐子 2000 『光州事件で読む現代韓国』平凡社
- 宮田 登 1977 『民俗宗教論の課題』未来社
- 渡邊昌美 1980 『巡礼の道』中公新書
- V・ターナー 1981 梶原景昭訳『象徴と社会』紀伊国屋書店
- I. Reader 1993 “Introduction”, I. Reader & T. Walter (ed.) *Pilgrimage in Popular Culture*, The Macmillan Press Ltd.

(秋田大学教育文化学部)

(2001年2月28日 審査終了受理)

Pilgrimage, *Sunrae* and a Nationalism in Contemporary South Korea: Since *Kwangju Minjung* Uprising in 1980

MANABE Yuko

The purpose of this paper is to point out that the phenomenon of pilgrimage, a sphere of folkloristic studies, is not necessarily religious a priori and is sometimes highly political. This is shown through a study of the origin and the forming process of a “*sunrae*” cause by a political incident. This paper takes up *Kwangju Minjung* Uprising (1980) and the following *sunrae* phenomenon as a good example.

Activist students and workers already began visiting *Kwangju* as a so-to-speak “holy place of democracy” from the early 80’s. It was gradually routinized as *sunrae* during the 80’s, when they were absorbed in avenging battles with riot police. People began talking about this *sunrae* as a literally religious phenomenon for its own sake, on the other hand as a metaphor.

While making a tour of old battlefield of *Kwangju Minjung* Uprising, the life and death of the victims were often told; they all died as a “misrepresented soul”, “rioter”, or “red”, deviating from the objects of Confucian rituals. The stories of deaths told in *Kwangju sunrae* have created the positive meaning of “May *Kwangju*” with some ideology to counter-evaluate these negative deaths. The stories of the memory of massacre in *Kwangju Minjung* Uprising are in the political context to go over the nation-state nationalism which has been taken for granted, and to head toward the ethno-nationalism instead.

Thus, the metaphoric *Kwangju sunrae* is tangibly symbolized as a realizing process of “One Korea”. There, *Paegdu San* (Mt. *Paekdu*) near the Chinese border is depicted as a synchronic image of unification, and “Tradition of Resistance” in *Jeonra Do* is narrated as a diachronic image of unification.

key words: *Kwangju Minjung* Uprising, pilgrimage (*sunrae*) to “May *Kwangju*”, narrative of deaths, nation-state nationalism/ethno-nationalism, alternative country
